【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第 28 巻 奈良絵本集 6

（2019 年 10 月刊行・八木書店）

解題

恋田知子・石川透

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/510

『奈良絵本集 六』解題

恋田 知子
石川 透

しづか

装訂　袋綴　一冊
表紙　紺色表紙。見返しは濃緑色地金切箔散らし。
料紙　鳥の子紙
法量　縦三三・五cm×横二五・〇cm
外題　左肩に金泥秋草下絵の丹色地の題簽に「しつか」と墨書。
墨付　三十七丁半
行数　十行
字高　約二八・五cm
挿絵　半丁十三図、見開三図。
書写年代　〔室町時代末期〕写

（請求記号九一一・六―イ七一）

本書は、幸若舞曲「静」を読み物として奈良絵本に仕立てたものである。

幸若舞曲とは室町時代に流行した舞を伴う語り物芸能である。判官物や曾我物など軍記物語を題材にした演目が多く、織田信長や豊臣秀吉など戦国武将に愛好され、徳川幕府の庇護を受けたが、歌舞伎や浄瑠璃など新興芸能の流行にともない、次第にその人気は衰退していった。一方、室町時代後期より各流派で語りの台本である正本が整備され、早くから読み物としても親しまれた。舞曲の詞章は「舞の本」と称され、室町時代後期から江戸時代初期には数多くの写本や版本が作られ、詞章としては現在、五十番が知られている。

さらに室町時代から江戸時代前期にかけて、舞曲はお伽草子と並んで数多くの絵巻や奈良絵本にも仕立てられた。舞曲の絵入り本は写本だけでも二百点を超える。とくに寛永年間に代表的な演目三十六曲をまとめた絵入り版本「舞の本」が刊行されると、これを粉本とした絵巻や奈良絵本が次々と制作され、一層享受の裾野を広げていった。寛文・延宝頃に制作された舞曲の絵巻や奈良絵本には、詞書の筆跡や画風が同様な伝本が複数確認されており、絵入り版本を粉本として揃いの絵巻や奈良絵本がいくつも制作されていたと考えられる。[1] これらは、豪華絢爛な体裁や伝来などから大名家の道具類として享受されたものと推察され、舞曲は江戸時代に至ってもなお、武家の間で重視されていたことが窺い知れる。

こうした舞曲の絵入り写本群のうち、本書はその初期に位置づけられる室町時代末期に書写された大型奈良絵本である。様々な物語や芸能へと展開し判官物として親しまれた源義経、その愛妾「静御前」を主人公に据えた物語で、その概略は以下のとおりである。

義経の奥州下向後、静は京の浄土寺に身を隠していたが、下女あこやの密告により梶原景時に捕らえられ、鎌倉へと護送される。頼朝と対面した静は景時から胎内探しを宣告される。母の磯禅師が頼朝の御台所に嘆願し、処刑寸前で助けられた静は土肥実平のもとに預けられるも、生まれた義経の子は男子であったため、梶原景季によって海へ投げ捨てられる。悲しみに沈む静のもとに、その学問や芸能を慕って御台所や大名の北の方が集まり、『伊勢物語』の奥義などを尋ねる。その後、鶴ヶ岡八幡宮の社頭で、静は義経を偲び「しづやしづ」と歌いながら舞い、頼朝の不興を買うが、重忠の取りなしで所領や俸禄を受ける。静はそれらすべてを寺社に寄進し、母とともに京へと帰る。

『義経記』巻六「静鎌倉へ下る事」「静若宮八幡宮へ参詣の事」における静と磯禅師の物語を骨子とする。ただし舞曲では、女人教化の場を彷彿とさせる浄土寺聖による静への五戒説法をはじめ、静による『源氏物語』巻名の名寄せや高家の女性たちへの『伊勢物語』奥義の披露など、独自の展開を見せる。舞曲では静と磯禅師の母娘が物語の主軸となり、女性をめぐる物語としての要素を増幅させている。その背景には、女性芸能者の実態や浄土寺における唱導の反映なども指摘される。[2]

他の舞曲作品同様、静の物語も室町時代より絵を伴う読み物として人気を博したようで、現在のところ本書以外に確認し得た奈良絵本・絵巻は以下の十二点に及ぶ[3]。そこでもやはり女性たちに好んで読まれていたであろうことが推察される。

①米国議会図書館蔵　大型奈良絵本二冊。〔室町時代後期〕写。挿絵十七図（上冊半丁八図、見開一図。下冊半丁六図、見開二図）[4]。（国際日本文化研究センター奈良絵本データベースより全文画像公開。www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/naraehon/htmls/shizuka.html）

②京都大学文学部蔵　大型本改装絵巻二軸。〔江戸時代初期〕写。挿絵十九図（上巻半丁八図、見開二図、下巻半丁六図、見開三図）。（京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むろまちものがたり』一、臨川書店、二〇〇〇年）

③大阪大谷大学蔵　大型本改装絵巻一軸（存巻上）。〔江戸時代初期〕写。挿絵十図（半丁七図、見開三図）。（大阪大谷大学電子版貴重図書コレクションより全文画像を公開。http://www2.osaka-ohtani.ac.jp/sizuka/index.html）

④根津美術館蔵　横型本改装絵巻一軸（存巻上）。〔江戸時代初期〕写。挿絵五図（半丁四図、見開一図）。伝飛鳥井栄雅息女一位局筆。

⑤国文学研究資料館蔵　横型奈良絵本・屏風貼込六曲一双。〔江戸時代初期〕写。挿絵十五図（半丁十二図、見開三図）。（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより全文画像を公開。https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200003070/viewer）

⑥国文学研究資料館蔵　大型奈良絵本二冊。〔江戸時代前期〕写。挿絵十二図（上冊半丁五図、見開一図、下冊半丁五図、見開一図）。（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより全文画像を公開。https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200003085/viewer）

⑦富山市立図書館山田孝雄文庫蔵　横型奈良絵本一冊（巻末一部欠）。〔江戸時代初期〕写。挿絵八図（半丁五図、見開三図）。（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより全文画像を公開。https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100257410/viewer/1）

⑧石川透氏蔵　横型奈良絵本一冊（存巻下）。〔寛永頃〕写。挿絵九図（半丁八図、見開一図）。

⑨國學院大学図書館蔵　横型奈良絵本合一冊。〔寛永頃〕写。挿絵十三図（半丁十一図、見開二図）。

⑩名古屋市蓬左文庫蔵　奈良絵本一帖（存巻上）。〔江戸時代前期〕写。挿絵七図（全て半丁）。

⑪フランクフルト市立工芸美術館蔵フォレッチ・コレクション　横型奈良絵本一冊（存巻中）[5]。〔江戸時代前期〕写。挿絵五図（全て半丁）。

⑫大阪青山短期大学蔵　横型奈良絵本三冊。〔元禄頃〕写。挿絵十五図[6]。

このほか、版本では寛永頃の丹緑本が伝存し、さらには舞曲「静」から派生した物語草子で右の諸本とは大きく異なる本文を有し、新たな物語へと展開を遂げた写本も数種報告されている[7]。静の物語が読み物としていかに広く享受されていたか、窺えよう。

奈良絵本・絵巻の特徴としては、右に示したように、現存本は巻子や屏風に改装されてはいるものの、その大半が元々冊子本として制作されていたことが指摘できる[8]。例えば、④根津美術館蔵の絵巻は従来小絵とされてきたが、原本を確認したところ、各紙の横幅が概ね二二cm前後であり、料紙の継ぎ目や手擦れ跡があることなどから本来は冊子本であった可能性が高い。残念ながら上巻のみの端本で錯簡も認められるが、静が鎌倉へ護送される場面では料紙の全面に雲や海、山並みを配し、二紙にわたってゆったりと描く点に特徴があり、素朴な描写には古雅な趣がある。本文は物語草子の伝称筆者としてしばしば比定される飛鳥井栄雅女の一位局の筆とされ、俄には首肯しがたいものの、優美で繊細な筆致に女手を思わせる優品である。いずれにしても、静の物語絵の多くは成立当初は巻子ではなく、冊子の形で受容されたのであり、享受層を窺わせる[9]。

そうしたなかにあって、本書は挿絵に本文が入り込み、上段に本文、下段に

人物を中心にした、慶長頃の大型奈良絵本に見られる特徴があり、貴重な伝本と位置づけられる。現存最古写本と推定される①米国議会図書館蔵本も同様の体裁をなし、挿絵の場面選択にも本書と共通する箇所がある。①本の挿絵十七図のうち、九図については構図の上で本書と一致する。だが、下女あこやが高札を見て景時に密告をする場面（本書九～一二頁）は人物の配置や動作などで一致するものの、次のあこやが景時を浄土寺へ導く場面（一四頁、一六～一七頁）は①本には描かれておらず、本書では本文を散らし書きにしたうえで二図（一図は見開）にわたって描くなど、相違を見せる。比較的書写年次の古い②京都大学文学部蔵本や③大阪大谷大学蔵本では、続く浄土寺での尼僧たちとの別れや五戒説法の場面を描く前に後者の場面を付しており、諸本各々で重なりを見せる。しかし、描かれる場面は必ずしも固定しておらず、各本それぞれの影響関係についても精査する必要があろう。本文を散らし書きにまでして、敢えてあこやにかかわる場面を連続して複数描き込もうとする点は、本書独自の特色といえる。

ちなみに、⑥国文学研究資料館蔵の大型奈良絵本は、現存諸本のうち比較的新しい書写ではあるが、先行する伝本の挿絵を踏まえつつも女性芸能者や尼僧を前面に描き出すなど、独自の改編が認められ、注目すべきものである。例えば、生まれた男子を景季が海に投げ捨て殺害する場面（本書六二頁）は諸本に共通して描かれるにもかかわらず、⑥本にはなく、もっぱら静と磯禅師、浄土寺の尼僧など女性たちの描写に筆を費やすのである。凄惨な場面を避けたのは、祝言性の重視や女性の享受を意図したことによると考えられよう。なぜなら、同じく女性芸能者の活躍を描いたお伽草子『唐糸草子』の伝本にも、⑥本と同じ書型で本文の筆跡や挿絵の色遣いをはじめ、樹木や人物の描き方、衣の模様にいたるまで酷似し、同筆と推定される大型奈良絵本（国文学研究資料館蔵）が現存しているのである。両物語の持つ祝言性や豪華な造本のあり方などから、特定の女性に向けた嫁入り本として、同工房において揃いで仕立てられた可能性が指摘できる。[10]

こうした諸本における挿絵の場面選択や描写の相違は、舞曲「静」が持つ豊かな物語性に起因するものに他ならず、享受の層にあわせて改編された可能性も考えられ、前述の舞曲を離れた読み物として本文が様々に作り替えられてゆくことにも通じるものがある。

なお、舞曲正本の諸本は本文によって大頭流と幸若流に大別されるが、現存する奈良絵本・絵巻『静』の大半は基本的に大頭系諸本の本文と共通するのに対し、本書のみ幸若系の本文に近いことが指摘されている。[11] とは言え、他伝本のなかには大頭流と一致せず、幸若流と一致する部分を数箇所含むものもあり、[12] 容易には分類しがたく、今後さらに諸本を精査してゆく必要がある。

（恋田知子）

【注】

（1）小林健二「幸若舞曲とお伽草子」（徳田和夫編『お伽草子百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）、星瑞穂・石川透編『舞の本をよむ―武将が愛した舞の世界の物語』（三弥井書店、二〇一四年）、海の見える杜美術館編『幸若舞曲と絵画―武将が愛した英雄たち』（二〇一九年）など参照。

（2）徳江元正「静御前の廻国」（『國學院雑誌』六一―一、一九六〇年一月）、室木弥太郎『増訂語り物〈舞・説経・古浄瑠璃〉の研究』（風間書房、一九九六年、初版一九七〇年）、岩松研吉郎「巻六の静について―『義経記』ノート・2」（『芸文研究』五七、一九九〇年三月）など参照。

（3）小林健二「『舞の本絵巻』の制作をめぐる諸問題―付、幸若舞曲の絵入り本一覧稿（増補改訂）」（『国文学研究資料館紀要』四三、二〇一七年三月）をもとに一部増補し、現存諸本の確認を試みた。原本未見の資料については、依拠した文献により情報を追記した。

（4）辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』（笠間書院、一九九九年、初出一九九四年）など参照。

（5）ベルント・イェッセ「フランクフルト市立工芸美術館蔵フォレッチ・コレクション奈良絵本群について」（『国語国文論集』二四、一九九五年三月）参照。石川透氏の御教示並びに画像提供による。

（6）松浪久子・藤田愛子「大阪青山短期大学所蔵絵入り本解題（1）―幸若物（一）」（『大阪青山短期大学研究紀要』三三、二〇〇九年三月）参照。

（7）大阪大谷大学蔵『静』（③とは別系統。冊子改装の巻子本で絵は切り離されて現存せず。舞曲とは異なる趣向、異伝を取り込む）。京都大学文学部蔵『しづか』・『しづかの物語』（②とは別系統。〔江戸時代前期〕・〔室町時代末期〕写本。舞曲正本を大きく離れて独自の物語を形成）がある。松浪久子「中世文学の一展開―奈良絵巻「静」の周辺―」（『大阪青山短大国文』一、一九八五年一月）、橋本正俊「しづか（三種）解題」（京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むろまちものがたり』一、臨川書店、二〇〇〇年）など参照。

（8）古書店目録によれば巻子と表記された静の絵入り写本もあるが、現在は所在不明。改装の可能性もあろう。前掲注（3）小林論文参照。

（9）本叢書掲載『磯崎物語』の解題において、石川透氏は磯崎伝本の多くが横型奈良絵本であることに着目し、豪華な絵巻を求める読者層とは異なり、裕福な町人層に好まれた可能性について言及する（新天理図書館善本叢書『奈良絵本集』四、八木書店、二〇一九年）。

（10）この点については、恋田知子「嫁入り道具としての奈良絵本」（『異界へいざなう女―絵巻・奈良絵本をひもとく』平凡社、二〇一七年）において検討した。なお、本叢書掲載予定の天理図書館蔵『宝月童子』についても、原本調査の結果、⑥本と同体裁、同筆の奈良絵本であることが判明した。

（11）麻原美子『幸若舞曲考』（新典社、一九八〇年）など参照。

（12）前掲注（7）橋本解題など参照。

【附　記】

貴重な資料の閲覧をご許可くださいました根津美術館、國學院大学図書館、名古屋市蓬左文庫に御礼を申し上げます。

まんぢうのさうし

装訂 袋綴　二冊
表紙 打曇表紙
料紙 鳥の子紙
法量 縦三二・二cm×横二二・〇cm
外題 左肩に銀泥秋草下絵の丹色地の題簽に「まんちうのさうし上（下）」と墨書。
墨付 上冊二十三丁、下冊十九丁。
行数 九行
字高 約二六・五cm
挿絵 上冊半丁十一図、見開一図、下冊半丁十一図。
書写年代 〔江戸時代初期〕写

（請求記号九一三・五―イ一八九）

本書は、前述の『しづか』と同様、幸若舞曲を奈良絵本に仕立てたものである。その内容は以下のとおりである。

（上冊）多田満仲は天下に並び無き武将であったが、仏道に深く帰依し、息子の美女御前を摂津国中山寺へ上らせる。武芸に励み仏法を疎かにしては悪行を繰り返す美女に激怒した満仲は、その首を討つよう家臣の仲光に命じる。仲光は殺すにしのびなく、自分の息子幸寿丸を身代わりとし、美女の首と偽って差し出す。

（下冊）美女を叡山へ逃がした後、仲光は自害を図るが、妻に諭され思いとどまる。美女は恵心僧都の弟子となり、仏道に専心して円覚と名乗る。その後、故郷の多田の里を訪れた円覚は祈禱により母の盲目を治し、自分が美女であると明かす。満仲夫婦は仲光の忠義を知って所領の半分を与え、小童寺を建立し、身代わりとなった幸寿丸の菩提を弔った。

多田源氏の祖とされる満仲の発心譚については、早く『今昔物語集』巻十九「摂津守源満仲出家語」に見え、同内容の説話が『宝物集』巻七や『古事談』第四にも収められる。そこでは、殺生無慚の満仲を息子の源賢が嘆き、恵心僧都に依頼して出家させるという内容で、舞曲とは大きく異なる。舞曲の典拠は、夙に岡見正雄氏によって、鎌倉時代の説教僧の手控えである説草『多田満中』（京都大学文学研究科蔵写本、一帖）に求められることが指摘されている。[1] 物語の展開や細かな表現において共通し、舞曲「満仲」が法華経の功徳を説く説教の種として語られていた説話をもとに成り立ったことは明らかである。ただし、冒頭で法華経を宣揚しつつも、巻末に天台本覚思想の立場から法華念仏一体論を示しており（本書一七三頁）、舞曲独自の展開を見せる。[2] なお、舞曲と同材のものに謡曲「満仲」[3]（一名、「仲光」）があり、多田の在地伝承を取り込んだ物語草子に『多田満中』[4]がある。このように「満仲」の物語は身代わり譚の嚆矢として盛んに享受され、近世の歌舞伎や浄瑠璃などにも大きな影響を与えた。

『鹿苑日録』明応七年（一四九八）二月二十九日条には、「摂州優者両人来、演多田満仲并奥州佐藤兄弟事」とあり、「満仲」が「奥州佐藤兄弟」すなわち舞曲「八島」と並んで、早くから演じられていたことがわかる。越前幸若小八郎家に伝わる『幸若家系図』には、幸若の元祖桃井安直が日吉権現の神前で「満仲」を語り、神託によって幸若舞を創始したことが記されており、伝承ではあるが、本曲がいかに重要なものであったかを物語っていよう。

舞曲「満仲」の諸本は、天正三年（一五七五）三月書写の岩国香川家蔵『円覚物語』[5]をはじめ、十点近くの伝本が知られ、幸若系正本を中心とする系統と大頭系正本を中心とする系統に大別される。[6] 奈良絵本・絵巻についても、断簡も含めると十点を超える伝本が確認されており、[7] 人気のほどが窺えよう。本書以外で主なものを挙げると、以下のとおりである。

①大阪青山歴史文学博物館蔵　大型本改装絵巻二軸。文明十三年（一四八一）本

奥書。〔室町時代後期〕写。挿絵十七図（上巻七図、下巻十図）。尾張徳川家伝来。[8]

②大阪青山歴史文学博物館蔵　大型奈良絵本二冊。〔寛永頃〕写。挿絵二十二図（上冊十図、下冊十二図）。[9]

③東洋文庫蔵　大型奈良絵本二冊。〔江戸時代前期〕写。挿絵十九図（上冊半丁五図、見開三図。下冊半丁九図、見開二図）。東洋文庫蔵『しぐれ』『たまも』『しだ』『むらまつ』と同装訂・同筆の奈良絵本。[10]（財団法人東洋文庫所蔵画像データベースより全文画像公開。124. 33. 215. 236/gazou/index_img_iwasakizen-ponsasyoku. php?tg=&cl=ま）

④大阪大谷大学蔵　横型奈良絵本三冊。〔江戸時代前期〕写。挿絵二十二図（上冊半丁七図、中冊半丁八図、下冊半丁七図）。[11]（大阪大谷大学電子版貴重図書コレクションより全文画像を公開。http://www2. osaka-ohtani. ac. jp/manjudonososhi/index. html）

⑤北海道大学附属図書館蔵　横型奈良絵本三冊。〔江戸時代前期〕写。挿絵十六図（上冊半丁六図、中冊半丁六図、下冊半丁四図）。（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより全文画像を公開。https://kotenseki. nijl. ac. jp/biblio/100000078/viewer/1）

⑥西尾市岩瀬文庫蔵　横型奈良絵本三冊。〔江戸時代前期〕写。挿絵十五図（上冊半丁五図、中冊半丁五図、下冊半丁五図）。[12]

⑦國學院大学図書館蔵　横型奈良絵本三冊。〔寛文頃〕写。挿絵十五図（上冊半丁五図、中冊半丁五図、下冊半丁五図）。

⑧東京大学国文学研究室蔵　横型奈良絵本一冊（存巻上）。〔江戸時代前期〕写。挿絵八図（全て半丁）。（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより全文画像を公開。https://kotenseki. nijl. ac. jp/biblio/100000199/viewer/1）

⑨愛媛大学附属図書館蔵　絵巻二軸。〔江戸時代中期〕写。挿絵十四図（上巻七図、下巻七図）。[13]（愛媛大学附属図書館ホームページより全文画像公開。http://www. lib. ehime-u. ac. jp/MANJU/）

※海の見える杜美術館蔵　大型奈良絵本二冊。〔寛文・延宝頃〕写。挿絵十一図（上冊半丁五図、見開一図、下冊半丁五図）。府内藩旧蔵揃い本「舞の本」の内。

現存本の中でも最古の奥書を有する①大阪青山蔵絵巻は、江戸時代後期の尾張徳川家の道具目録記載の「多田満中絵御巻物」に比定される貴重な伝本である。[14]小林健二氏によれば、説草と対応する文言が認められることなどから、説教台本から舞曲に展開する過渡期の形態の伝本と位置づけられる。[15]絵も、江戸時代前期に大名家の道具類として制作された金泥多用の豪華絵巻とは異なり、古雅な印象を受ける。原本未見ではあるが、資料目録掲載の写真で確認する限り、文明十三年の奥書は本文と同筆とみなされ、現存する舞曲「満仲」の最古写本よりも遥かに遡り、現存する奈良絵本群の中でも極めて古いものとなる。資料目録によれば、料紙の継目や綴穴の跡などからもとは冊子本であったと考えられるようだが、文明年間まで遡る彩色冊子本の例は他に聞かず、小林氏も指摘されるように、文明の奥書を持つ絵巻を転写した際にそのまま書写された可能性がある。いずれにしても現存最古写本と見て良く、今後の研究が俟たれる。

天理本は、現存諸本の中で最も多くの挿絵二十三図を有する点に特徴がある。また、本文を挿絵の前で散らし書きにはせず追い込みとし、文の途中であっても改頁にあわせて挿絵を付す点も特徴的である。本文の内容と近接した箇所に挿絵を付していない点からも、詞書本文と挿絵は別々に制作されたと推測される。挿絵に本文が入り込んだ形式の前述『しづか』の奈良絵本に比して、その挿絵と本文のあり方からも時代的にやや下った印象を受ける。

試みに、天理本の挿絵を基本とし、諸本との対応関係を以下の表に掲げた。天理本の挿絵に対応する場面の有無を諸本の挿絵掲出順で示しており、欠けている数字はその順に該当する挿絵が天理本にはないことを表す。①大阪青山蔵絵巻、②大阪青山蔵奈良絵本については、未見資料で描かれた場面も不明のため、資料目録に抄出掲載された図版により対応するものを○印で、構図まで共通する場合は◎印で示した。なお、舞曲「満仲」の絵入り本には、大英図書館蔵の〔慶長中頃〕刊の古活字丹緑本（古活）やそれをもとにした〔寛永頃〕刊の整版丹緑本（整版）などもあり、[17]整版本をもとにした※海の見える杜美術館蔵の奈良絵本（海杜）を含め、参考として表の下方に加えた。

挿絵場面の諸本対照表

天理本（本書）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	古活	整版	海杜
1屋敷内の満仲夫婦と美女（上2ウ3オ）					1							
2上人と対座する満仲（6オ）			1			1	1	1	1	(1)	1	1
3上人に法華経を伝授される満仲（8ウ）	○		2	1	2			2	2	2	2	2
4中山寺で悪行を重ねる美女（10オ）		◎	4					3	3	3		
5斬りかかる満仲、経巻で守る美女（11ウ）	○		5	4	4	4	3	4	4	4	3	3
6仲光に助けを求める美女（13ウ）				6	5							
7下山した幸寿丸を迎える仲光（15ウ）				7	6				5			
8幸寿丸に身代わりを頼む仲光（17ウ）			6	8		5	5	5	6	5	4	4
9母に暇乞いをする幸寿丸（19ウ）	○		7	9	7	7	6	6	7	6	5	5
10辞世の歌をしたためる幸寿丸（21オ）			8	10	8			7		7		
11幸寿丸の首を斬る仲光（22オ）	○	◎	9	11	9	8	7	8		8		
12美女の首と偽り差し出す仲光（23オ）	○		10	12	10		8		8	9	6	6
13悲しみに暮れる仲光夫婦（下1ウ）	○		11	13	11	9	9		9	10	7	7
14自害を図る美女を諭す仲光夫婦（2ウ）												
15美女を叡山へ逃す仲光（4オ）	○			14	12	10	10		10			
16自害しようとする仲光を諫める妻（6オ）			13	15			11		12	11	8	8
17叡山で恵心僧都と出会う美女（7ウ）	○			16								
18恵心・円覚と対面する満仲（10オ）			14	18		11			12	12	9	9
19円覚と語る満仲夫婦（12ウ）			16	19		13						
20持仏堂で祈る満仲夫婦と円覚（14オ）	○	◎	17	20	14	14	14		13	14	10	10
21再会を喜ぶ満仲夫婦と円覚（16ウ）	○	◎	18	21	15	15	15	14	14	(15)	11	11
22屋敷内の満仲夫婦と女房達（17ウ）												
23屋敷内の満仲、仲光、美女（19オ）												

「満仲」諸本の本文については須田悦生氏による詳細な研究があり、[18]絵入り本についても天理本（本書）、③東洋本、⑤北大本、⑥岩瀬本、⑦國學院本、⑧東大本、および寛永整版本の七点を比較している。須田氏は、絵入り諸本の本文は概ね大頭系統によるが、天理本と⑤北大本については大頭系を基本としながら幸若系の詞章を部分的に含み込み、他の奈良絵本と性格を異にしており、語りの台本を奈良絵本化したものと推察する。挿絵については、天理本は⑤本と巻頭をはじめ場面選択の上で十六図のうち十三図が共通するものの、構図や人物描写などは相違しており、直接の影響関係を否定する。一方、場面選択において、⑥岩瀬本と⑦國學院本との共通性、③東洋本と⑧東大本と版本との共通性が認められ、構図の上でも近似することからそれぞれ相関関係にあるとする。後者については本文においても近似性が認められるとあり、版本をもとに奈良絵本に仕立てたとも考えられよう。

舞曲の絵入り本全般に言えることだが、書写年次の古いものほど本文内容に即して多くの場面を描くのに対し、時代が下るにつれて省略され、前述の③東洋本と⑧東大本及び版本との関係の如く、挿絵となる場面も寛永整版本の影響で固定化する傾向がある。[19]須田氏の対象とした伝本に①②④⑨本を加えた右表から、「満仲」の絵入り本についても同様の傾向が見てとれよう。

なかでも②大阪青山本は、天理本の挿絵を考察する上で極めて重要な伝本である。◎を付したように、目録掲載の五図のうち四図において、構図や人物の配置、描写など天理本と酷似している。例えば4の中山寺で悪行を重ねる美女の挿絵（一〇九頁）は、③東洋本、⑧東大本、⑨愛媛大本、古活字本でも、武芸に励む美女の様子が共通して描かれ、③⑧本の構図は古活字本に近似するのに対し、書写年次の古い①本や④⑤⑥⑦本には見えず、必ずしも描かれる場面ではなかった。ところが、天理本と②本では構図はもとより、太刀を振り上げる美女、足下に乱れる経巻、逃げ惑う稚児たち、言い争う稚児たちと経机に両肘をつき困り果てる僧侶など、人物の動作や向きにいたるまで全て一致しており、両書共通の祖本があったか、あるいは両書に直接の影響関係があったことは明白である。

しかしながら、②本の掲出五図のうち四図までは同構図・同一の人物描写であるにもかかわらず、おそらく巻末にあたる一図については、稚児文殊を思わせる獅子に乗る稚児を祀る小童寺を描いており、天理本と大きく相違する。絵入り本諸本において、比較的書写年次の古いものに、末尾に小童寺を描くことで縁起としての側面を強調する伝本（①、④）があるのに対し、寛永整版本など時代の下った伝本（⑥、⑦、⑨、海杜）では、満仲夫妻と円覚の喜びの再会場面を巻末に据える。天理本はそれとも異なり、再会を遂げた後の満仲、仲光、美女と思しき男性三人のみを描く場面（一七七頁）で終える。その点では、満仲が仲光に宛行状を授ける場面を描く③東洋本、⑤北大本の巻末図に近いものがある。巻末図については、小童寺を描くものから源氏の主従に焦点化しその繁栄を寿ぐものへの移行[20]が想定され、天理本の挿絵は②本の挿絵（あるいはその祖本）をもとにしつつも小童寺ではなく、源氏の繁栄を寿ぐ図様に改めた可能性も考えられる。

なお、②本の本文は散らし書きされた上でその内容に即した箇所に挿絵を付しており、天理本と異なる。本文系統についても、とくに目録に掲出された後半の一部分は天理本だけでなく諸本を通じて大きく相違しており、注意される。①の絵巻とあわせて、本文と挿絵の全容が公開され、天理本との関わりについて考究する機会を俟ちたい。

（恋田知子）

【注】

（1）岡見正雄「説教と説話―多田満仲・鹿野苑物語・有信卿女事―」（『仏教芸術』五十四、一九六四年五月）参照。その後、庵逧巌「舞曲「満仲」の形成」（『山梨大学教育学部紀要』五、一九七四年一一月）によって、さらに詳細な分析がなされた。

（2）麻原美子「満仲」解題（新日本古典文学大系『舞の本』岩波書店、一九九四年）、小林健二「満仲譚の展開」（『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―』三弥井書店、二〇〇一年、初出一九九七年）参照。

（3）大永四年（一五二四）の『能本作者註文』には世阿弥作として記され、室町中期成立の金春系装束付『舞芸六輪次第』にも演出についての記事がある。舞曲同様、説草をもととし、室町時代中期には成立していたと考えられる。

（4）藤井隆氏蔵、〔元禄頃〕写本。謡曲や舞曲とは別に、多田の伝承をもとに述作されたとの指摘がある。藤井隆編『未刊御伽草子集と研究』三（未刊国文資料刊行会、一九六〇年）参照。

（5）広島女子大学国語国文学研究室編『幸若舞曲集』一（渓水社、一九七六年）参照。

（6）須田悦生「幸若舞曲「満仲」の諸本をめぐって―幸若舞曲諸本研究序説―」（『伝承文学研究』二〇、一九七七年六月）、同「舞曲「満仲」の諸本・補遺―香川本・秋月本の性格―」（『静岡女子短期大学研究紀要』二五、一九七八年三月）、麻原美子『幸若舞曲考』（新典社、一九八〇年）など参照。

（7）小林健二「『舞の本絵巻』の制作をめぐる諸問題―付、幸若舞曲の絵入り本一覧稿（増補改訂）」（『国文学研究資料館紀要』四三、二〇一七年三月）をもとに主要な伝本を掲出した。原本未見の資料については、依拠した文献により情報を追記した。

（8）『思文閣古書資料目録　善本特集』第十四輯（二〇〇二年）参照。

（9）『思文閣古書資料目録　善本特集』第九輯（一九九七年）参照。

（10）石川透氏により同時期に同一工房で制作されたものと推測されている。石川透『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店、二〇〇九年）、東洋文庫日本研究班編『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅷ―東洋文庫　絵本コレクション』（三弥井書店、二〇一六年）参照。

（11）福田晃・真鍋昌弘編『幸若舞曲研究』九（三弥井書店、一九九六年）参照。

（12）西尾市岩瀬文庫編『越境する絵ものがたり』（二〇一六年）、西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース参照。

（13）藤田恵子「『多〻乃まん中』絵巻の考察」（『愛文』二五、一九九〇年）参照。

（14）龍澤彩「大名文化と絵本」（『お伽草子百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）参照。

（15）小林健二「幸若舞曲とお伽草子」（『お伽草子百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）参照。

（16）『大英図書館蔵日本古版本集成』四八〇（本の友社、マイクロフィッシュ、一九九六年）による。大英図書館蔵古活字本には前後に欠丁があり、その部分の挿絵については、小林氏の考察により対応図を（　）内に示した。前掲注（2）小林論文参照。なお、近時国文学研究資料館の所蔵となった古活字丹緑本の断簡は大英本の欠けた（15）図を含む二丁分で、大英本のツレの可能性が高い。小林健二氏のご教示による。

（17）中嶋謙昌「京大本版本『満仲』攷」（京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むろまちものがたり』八、臨川書店、二〇〇一年）参照。

（18）前掲注（6）須田論文参照。

（19）麻原美子「在外「舞の本」をめぐって」（『日本女子大学紀要文学部』三三、一九八四年三月）など参照。

（20）幸若舞曲「大織冠」の奈良絵本・絵巻についても、巻頭に鎌足邸を掲げ、巻末に興福寺を描く「興福寺の縁起伝承」を物語る系統と、藤原氏の氏神である春日社参詣を巻頭に据え、海女の死を鎌足や房前が嘆く場面で終わる「藤原氏の始祖伝承」を物語る系統とに大別され、古写本に前者の傾向が認められ、時代が下るにつれて後者の系統が定着する。恋田知子『薄雲御所慈受院門跡所蔵　大織冠絵巻』（勉誠出版、二〇一〇年）。

【附　記】

貴重な資料の閲覧をご許可くださいました西尾市岩瀬文庫、國學院大学図書館、海の見える杜美術館に御礼を申し上げます。

花鳥風月物語

装訂　袋綴　一冊
表紙　打曇表紙
料紙　鳥の子
法量　縦三二・〇cm×横二五・〇cm
外題　中央金紙題簽に「花鳥風月物語」と墨書
字高　約二七・〇cm
丁数　二十三丁内墨付二十一丁半
挿絵　見開九図
書写年代　〔室町時代末期〕写

（請求記号九一三・五―イ一四三）

本書『花鳥風月物語』は、一般的には御伽草子『花鳥風月』と呼ばれる作品であるが、御伽草子の目録や辞典類には、「花鳥風月物語」と称する別の物語も登録されている。『花鳥風月』の諸伝本は、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』三省堂書店、一九八二年）によって、高安六郎旧蔵本に代表される比較的簡略な本文を持つ一群、本文叙述の詳しい慶應義塾大学図書館蔵本の系統、及び版本並びに版本に近い本文を持つ諸本の三系統に大きく分けられている。その中で本書は、最も原初的な高安六郎旧蔵本と同系統の作品に分類される。松本は『花鳥風月』の諸伝本を三系統を通して二十数本並べているが、実際にはそれよりはるかに多く存在し、中でも奈良絵本については近年更に数多くの報告がなされている。

内容的には、在原業平や光源氏が登場し、貴族的な雰囲気が漂う作品であるため、その絵画化も多く行われたものと考えられる。その内容は、以下の通りである。

萩原院のとき、都西山の葉室中納言の屋敷で扇合わせが行われ、山科少将が出した扇には、公家と女性が描かれていた。人々は、この公家は業平か、源氏かと議論になり、花鳥、風月という出羽羽黒の姉妹の巫女を召して占わせることとなった。業平方が問うと、業平が憑依した花鳥に、風月が問い手となって口寄せによる問答が始まる。業平は、自分はまめ男という評判を得て、生涯の間に三千七百三十三人の女性と契りを結んだと話し、五条后、染殿后、二条后、伊勢斎宮等についても語る。しかし、扇の公家は業平ではなかった。そこで、源氏方が尋ねると、風月は光源氏の姿を鏡に映し出し、花鳥が源氏になり代わって、自らの生涯を語り出す。風月には末摘花の霊が移り、鏡にもその姿が現れ、源氏と問答を交わす。その後、鏡から末摘花が消え、風月は我を取り戻す。葉室中納言は、いまだ鏡に残った源氏に対して、源氏物語の不審を尋ねる。やがて、鏡に写る源氏の姿も消えると、花鳥も正気に戻り、扇に描かれたのは、源氏と末摘花であると決した。これを見聞きした人々は、夢幻の気持ちがして、花鳥と風月に多くの褒美を与えた。

扇合わせの絵を契機として、口寄せにより在原業平と光源氏を登場させるという筋立てであるが、登場人物を介した『伊勢物語』『源氏物語』の解説が主な内容となっている。両物語の教養書或いは啓蒙書として、多くの人々に受け入れられた作品といえよう。御伽草子を代表する作品の一つである。本作品に関する研究論文は数多くあるが、中でも、徳江元正『室町芸能史論攷』（三弥井書店、一九八四年）は、花鳥風月姉妹のように、室町期における高度な芸能を演ずる巫女たちの台本というべきものが、『伊勢物語』や『源氏物語』の註釈書や梗概書であったことを示した。更に、鷹司政通写『伊勢物語口伝次第』に「葉室家御相傳云」として本作品と同内容の文が見えることから、『花鳥風月』が葉室家御相伝の記録に即して創作されたものである点も指摘された、非常に重要な論考である。

『花鳥風月』諸伝本の内容に大きな差はないが、その本文記述については微

妙な違いもある。本書の位置を見るために、本書と同時代制作の、いわゆる室町末近世初期写と考えられる古奈良絵本を取り上げて、比較してみる。

高安六郎旧蔵本系統

高安六郎旧蔵　特大縦型奈良絵本一冊　文禄四年写（『室町時代物語大成』三）

天理図書館蔵　特大縦型奈良絵本一冊〔室町末期〕写（本書）

慶應義塾大学図書館蔵本系統

慶應義塾図書館蔵　特大縦型奈良絵本一冊〔室町末期〕写（『室町時代物語大成』三）

石川透蔵A　横型奈良絵本〔室町末期〕写（『奈良絵本・絵巻研究』三）

慶長頃刊古活字本系統

石川透蔵B　小型絵巻（一部欠）〔室町末期〕写

高安本には、奈良絵本としては珍しく奥書があり、文禄四年（一五九五）写とする。高安本は現在行方不明であるが、最善本の扱いを受けている。また他の四伝本も、同時代の制作であると考えられ、『浄瑠璃物語』と同じように、古奈良絵本が多く存在していて、組織的な制作が考えられる作品である。

その本文の違いを、それぞれの冒頭を列挙して見てみる（句読点は私に補った）。

高安本（『室町時代物語大成』による）

はきはらのゐんの御とき、みやこにし山、はむろのちうなこんの御しよにて、くものうへ人、なまかんたちめ、あつまりて、むめはちり、さくらはをそきおりふし、雨さへいたくふりつゝき、春の日くらしかたき、つれ〳〵のあまりに、あふきあはせをし給。

天理本

はきはらのゐんの御とき、みやこにし山、はむろのちうなこんの御しよにて、くものうへ人、なまかんたちめ、あつまりて、むめはちり、さくらはをそきおりふし、雨さへいたくふりつゝき、春の日くらしかたき、つれ〳〵のあまりに、あふきあはせをし給。

慶應本

はきはらのいんの御とき、みやこにし山、はむろ中なこんの御所にて、くものうゑ人、なまめ（ママ）かんたちめ、あまたあつまりて、むめはちり、さくらはをそきおりふしに、あめさへふりつゝき、春の日くらしかたき、つれ〳〵のあまりに、あふきあはせをし給ふ。

石川A本

はきはらのゐんの御とき、みやこにし山、はむろ中なこんの御所にて、くものうへ人、なまかんたちめ、あまたあつまりて、むめはちり、桜はをそきおりふしに、雨さへふりつゝき、春の日くらしかたき、つれ〳〵のあまりに、あふきあわせをし給ふ。

石川B本

はきはらのゐんの御とき、みやこにし山、はむろの中納言の御所、雲の上人、なまかんたち、あまたあつまりて、梅はちり、さくらはおそきおりふしに、雨さへいたくふりつゝ、春の日くらしかたき、つれ〳〵のあまりに、あふきあはせをし給ふ。

この冒頭の比較だけからでも分かるように、掲出した五伝本には細かな語句の違いが見られるが、それらの中でも、本書は文禄四年写の高安本と本文が近似している。残念ながら、原本同士の比較はできないが、極めて近い関係にある本と言えるであろう。

他の三本も微妙な差はあるものの、その原本同士を比較すると、本文の筆跡はどことなく似通っており、挿絵同士もその素朴な描き方に似た面が窺える。

中でも、本書には詞書の中に一人の人物が描かれる（一九二・一九三頁）等、独特な場面も存在する。他にも挿絵の隅に本文が入っている（一九四頁）等、制作の仕方を推測できる貴重な箇所が散見される。本文と挿絵の制作の順番は、挿絵が先であり、本文が後に行われ、一般的には、挿絵と本文は分業で制作し、

最後の工程で、組み合わせるのであるが、室町末江戸初期には、挿絵と本文の制作がかなり近くで行われていた、と考えるべきであろう。

ところで、本書には、前遊紙裏に、「飛鳥井殿雅俊卿　花鳥風月物語　詞書一冊　「琴山」（印）」、「繪光信筆」及び木村見室による「飛鳥井殿雅俊卿花鳥風月物語」（裏に「筆極軒」の黒印）と三枚の極札を貼付する。飛鳥井雅俊は、大永三年（一五二三）に没した室町時代の公家であるが、残念ながら、本書の書写年代はそこまで遡りがたく、また、その筆跡も異なる。ただし、本書と同様の絵入り古写本である慶應本には「飛鳥井栄雅卿之息女一位之局正筆」という極が付してある。他にも根津美術館に一位局筆と伝える奈良絵本が所蔵されており（本巻所収『しづか』解題参照）、伝承筆者としてはよく登場する人物である。栄雅は本書の極にある雅俊の父にあたり、書道飛鳥井流の祖とされる人物であるが、江戸時代の古筆家が飛鳥井流の人々を奈良絵本の詞書き筆者と見做していた事実は興味深く、今後の研究課題の一つと言えよう。

（石川透）